

多面的・多角的に考察する力を育成する歴史的分野の指導法の工夫 ～ロールレタリング的な活動を通して～

要約

現行版の学習指導要領解説社会編では、深い理解をともなっている知識を得るためには、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断する活動を行う必要があるとされている。しかし平成26年度までの福岡県学力実態調査でも指摘されているように、このような力は十分に育っているとは言い難い。そこで今回の研究では、多面的・多角的に考察する力とはどのような力なのか明らかにし、教師がその力を養うためにどのような指導法の工夫を行えばよいのかを研究することにした。

そこで、多面的・多角的な考察をするために本研究で取り入れたのは、ロールレタリング的な活動である。ロールレタリングとは、少年鑑別所や少年院で自己洞察のために考えられた技法で、役割交換書簡法とも言われる。手紙を書いて実際に相手に送るのではなく、自分自身で役割や立場を交替(ロール)しながら、一人二役で手紙のやりとり(レタリング)を行う。これによって相手の立場に立って考えることができるようになる。これを歴史的分野に当てはめると、ある歴史的な場面において、「どの立場の人」が「どんな面」からその歴史的事象を見ていたのか考えやすくなり、多面的・多角的に捉えることができると考えた。そこで以下の活動に重点をおいて研究を進めていくことにした。

つかむ	・役割、立場を確認する ・5W1Hをもとに、基本となる概念を習得する
深める	・手紙に対する返事を違う立場から書く ・様々な立場から手紙を書く
生かす	・手紙の内容から多面的・多角的に考察する

その結果、以下のような成果(○)と課題(●)を得た。

- 学習意欲に課題がある生徒も、ロールレタリング的な活動により意欲が向上した。
- 思考力などに課題がある生徒も、ロールレタリング的な活動により歴史的事象を様々な立場や面から考えたりすることができるようになった。
- ロールレタリング的な活動においては、思考力などに課題がある生徒が活動を進めにくい一面も見られた。さらに資料やヒントを提示するなど工夫する必要がある。

キーワード： 多面的・多角的な考察 ロールレタリング的な活動

1 主題設定の理由

(1) 歴史的分野の学習指導の動向から

現行版の学習指導要領解説社会編には、「歴史的分野において、知識とは単なる機械的・表面的な知識の記憶ではない。思考や表現の過程などもふまえて、内容をよく考えて身につけ、焦点や脈絡をもった自分の言葉で表現できるものである。」と知識の内容について規定してある。また、深い理解をとまなっている知識を得るためには、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断する活動を行う必要があるとされている。しかし平成 26 年度までの福岡県学力実態調査でも指摘されているように、このような力は十分に育っているとは言い難い。そこで今回の研究では、多面的・多角的に考察する力とはどのような力なのか明らかにし、教師がその力を養うためにどのような指導法の工夫を行えばよいのかを研究することにした。

(2) 生徒の実態から

生徒の実態調査の結果、社会を学習することにおいては全体の約 70%が「好き」もしくは「どちらかと言えば好き」といった肯定的な評価をしており、また授業時においても教師の発問に対し、考えようとする姿勢が多く見られる。学習プリントについても 9割近くの生徒がほとんど提出しており、授業に積極的に参加しようとする姿勢が見られる。しかし、「資料を読み解いたり、自分の意見を考えて記述したりすることが苦手」と答えた生徒は、全体の約 80%であった。授業時においても、多くの生徒が表やグラフなどを読み取ることはできるものの、複数の資料を関連づけて考察したり、自分の主張を根拠となる資料をもとに記述したりすることはできていない。学習プリントなどを見ても、「なぜ～なのか」という因果関係を問う課題等に対し、「自分は～だと思う」という主張までは書くことができるが、その根拠を「資料のこの部分から読み取ることができる」などと提示することはできていない。これらのことから、「資料の活用」や「思考・判断・表現」の力が不十分であるように思われる。また、4月に行われた標準学力分析検査でも、「資料の活用」や「思考・判断・表現」の得点率が 60%程度であり、この力が不十分であることは明白である。

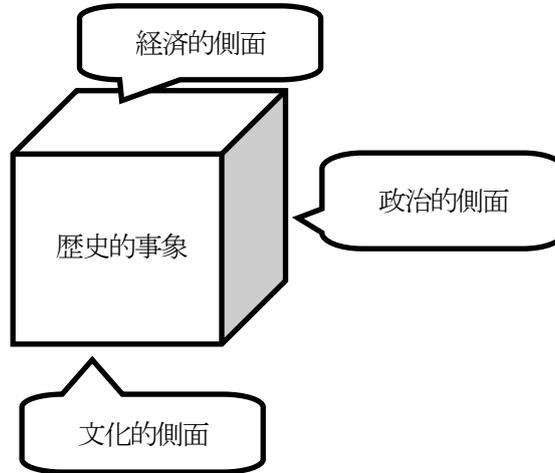
(3) これまでの指導上の反省や問題点から

これまでの歴史的分野の指導においては、ある歴史的事象に対して「いつ、どこで、なぜ、だれが、どのように、何をした」といういわゆる 5W1Hをもとに認識すること、つまり事実認識に終始してしまっていた。その原因は、授業時における資料を活用して考える際の指導の不十分さにあったと考える。これまでの「資料の活用」は、例えば元寇の学習で蒙古襲来絵詞を資料として提示はするものの、それはあくまで教師が元寇の説明をする際の補助的な役割に終始しており、生徒の能動的な学習にもとづくものにはなりえていなかった。その結果、授業時の学習プリントを見ても、資料をもとに自分の意見を構築したり資料を一面的にとらえたりしている生徒が多かった。そこで、単純に資料を提示するだけでなく、資料を生徒が能動的に使い、様々な立場や面を見させること、つまり多面的・多角的に考察させることは大変意義深いと考え、本主題を設定した。

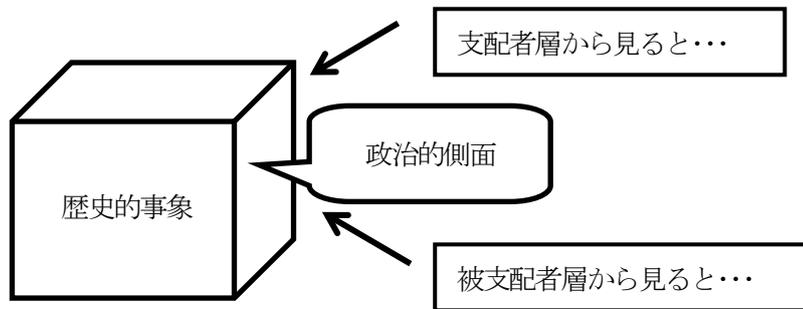
2 主題の意味

(1) 主題について

「多面的」とは、歴史的事象を様々な面（政治的側面・文化的側面・経済的側面など）から捉えることである。



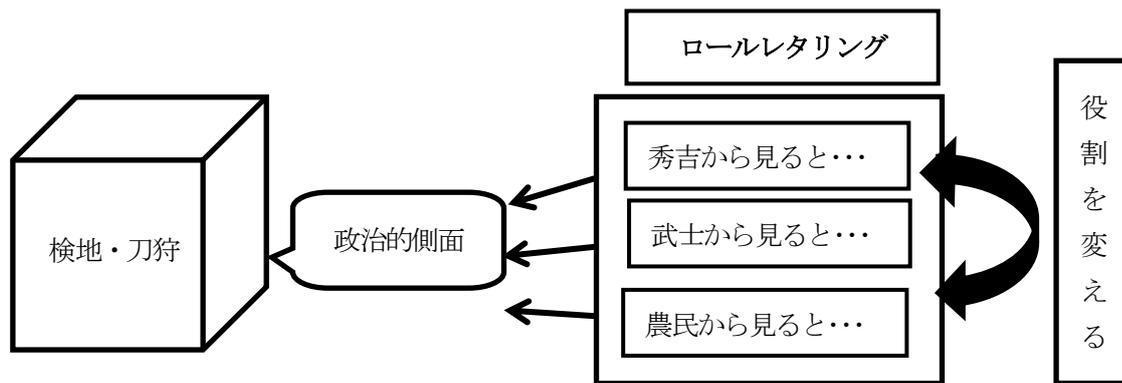
「多角的」とは、歴史的事象を様々な立場（支配者、被支配者など）の違いから捉えることである。



「多面的・多角的に考察する力を養う」とは、ある歴史的事象を一面的にしか見ることができない生徒が、様々な面や立場から歴史的事象を捉え、深く理解していくような力を育てることである。

(2) 副主題について

多面的・多角的に考察する具体的な手立てとして、本研究ではロールレタリング的な活動を取り入れる。ロールレタリングとは、少年鑑別所や少年院で、自己洞察のために考えられた技法で、役割交換書簡法とも言われる。手紙を書いて実際に相手に送るのではなく、自分自身で役割や立場を交替（ロール）しながら、一人二役で手紙のやりとり（レタリング）を行う。これによって、相手の立場に立って考えることができるようになる。これを歴史的分野に当てはめると、ある歴史的な場面において、「どの立場の人」が「どんな面」から、その歴史的事象を見ていたのか考えやすくなり、多面的・多角的に捉えることができるようになる。例えば、豊臣秀吉の太閤検地・刀狩りの場面に着目する。当時の時代背景は、長かった戦国時代が終わり秀吉によって全国統一が完成しつつある。戦いに加わっていたのは、いわゆる武士だけでなく半農半士といわれる地侍達もいた。彼らは農民でもあり、武士でもあった。そんな彼らの身分を明確に決めようとしたのが、太閤検地や刀狩りである。これを前の図で示すと以下のようなになる。



この場面において、ロールレタリング的な活動を行うことで、どのような面で（多面的）、どのような立場（多角的）を選ぶのかを考えることになる。刀狩を農民から見ると、刀などの武器を没収されたことによって一揆を起こしにくくなったという面がある。しかし、これを秀吉から見ると、身分を確定させることで下剋上の風潮を無くし、天下を安定して統治しようとしたという面が見えてくる。このように、ロールレタリング的な活動を行うことで、どのような立場から、どのような面を見るのかということを考えることになる。このように、歴史的場面の設定を行い、ロールレタリング的な活動を行わせることで、多面的・多角的に考察する力を養うことができるのではないかと考える。

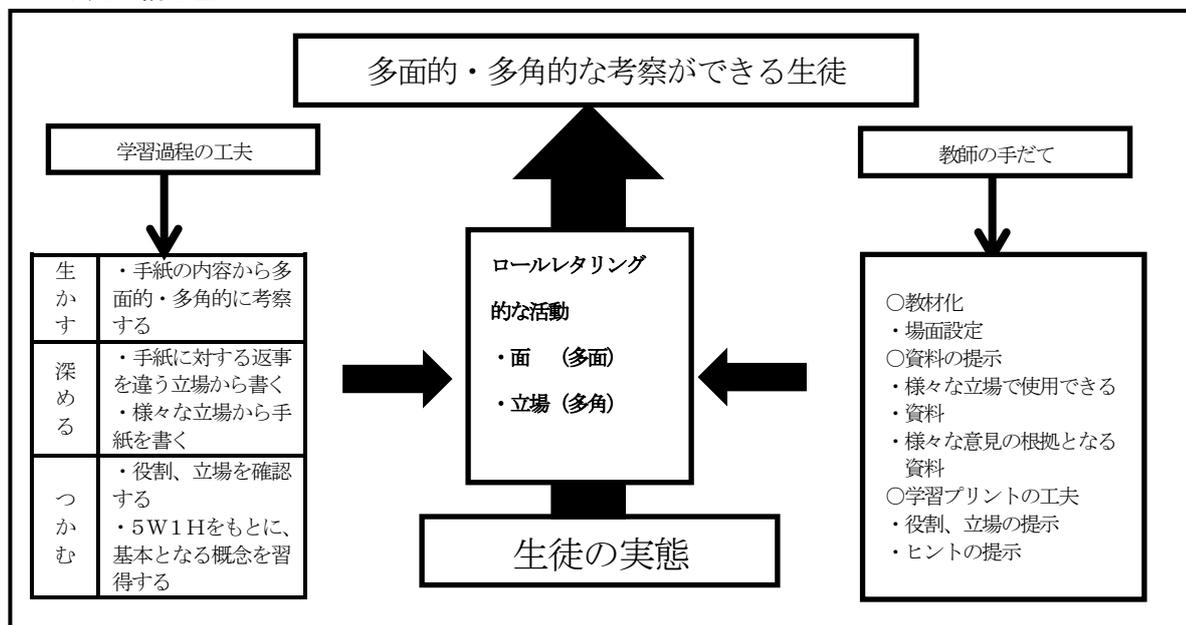
3 研究の目標

多面的・多角的に考察する力を養うために、ロールレタリング的な活動を学習過程に取り入れた指導法を究明する。

4 研究の仮説

歴史的分野の学習において、生徒がロールレタリング的な活動を行えば、「どのような立場の人」が「どのような面」から、その歴史的事象を見ていたのかを考えるようになり、多面的・多角的に考察する力が高まるであろう。

5 研究の構想図



6 研究計画の概要

(1) 研究計画

	研究計画	月	研究計画
5	研究主題の設定	1 0	検証授業（実践1）、仮説の修正
6	研究主題の作成	1 1	検証授業（実践2）
7	教材研究	1 2	データ分析とまとめ
8	教材研究・指導案作成	1	研究のまとめ・報告書作成
9	指導案審議・修正	2	研究報告

(2) 仮説検証の内容と方法

検証内容	検証方法	評価基準	
様々な立場（多角的）と様々な面（多面的）から物事を捉えることができている。	ロールレタリング的な活動による手紙の記述内容	A	歴史的事象について、三つ以上の立場から三つ以上の面を捉えることができている。
		B	歴史的事象について、二つの立場から二つの面を捉えることができている。
		C	歴史的事象について、一つの立場から一つの面しか捉えることができていない。

7 研究の実際

(1) 抽出生徒

本研究では、学級の中から4人の生徒を抽出し検証を行った。下表の○は学習意欲や思考力などが高い生徒ということを表し、△は学習意欲や思考力などに課題がある生徒ということを表している。

	学習意欲	能力
生徒A	○	○
生徒B	△	○
生徒C	○	△
生徒D	△	△

(2) 授業の構想

① 単元目標

- ・ ペリー来航から江戸幕府の滅亡、そして明治政府成立までの国内・国外の双方の動きに関心を持ち、意欲的に調べようとする。（関心・意欲・態度）
- ・ 開国から倒幕、新政府成立への展開を多面的・多角的に考察できる。（思考・判断・表現）
- ・ 資料を読み取り、自己の意見をまとめ発表することができる。（資料活用の技能）
- ・ 明治政府の成立過程を国内外の情勢を通して説明することができる。（知識・理解）

② 単元計画

関：関心・意欲・態度 思：思考・判断・表現 技：資料活用の技能 知：知識・理解

次	時	学習活動・内容	教師の手だて	評価規準
一	1	1. 欧米諸国のアジア進出など新たな動きが見られる中で、日本にどのような影響が出たのか考える。 ・ 水野忠邦の改革 ・ 幕府の改革から藩による改革へ ・ 薩摩藩や長州藩などの台頭	○国内でも幕府政治がゆきづまり、天保の改革などを行ったものの、時代の流れにあっておらず、失敗したことにも着目させる。	思：年表や資料などをもとに、幕府政治の行き詰まりと、薩摩・長州を中心とする新しい勢力の台頭について説明できる。

二	2 ①	2. ペリー来航の理由を考える。 ・捕鯨船の補給地 ・中国との貿易の中継地 ・日本の開国	○当時は燃料として鯨油を使っていたこと、アメリカがカリフォルニアを獲得したなどの背景にも着目させる。	知:ペリー来航の国際的な背景をとらえて説明することができる。
本時	2 ②	3. 開国に対し、幕府・大名はどんな考えを持っていたのか考える。 ・幕府は、日本の独立を守るために開国を決断した。大名達は、色んな考えがある中でも、共通していたのは、日本の独立を守るためであった。 →目的は同じだが、手段が違う。	○開国側と攘夷側の両方の立場にたって考えさせる。 ○欧米列強と日本との技術力の差に着目させる。	思:開国に対し、幕府・攘夷派の双方の考えを説明できる。 技:攘夷から倒幕へとうつる動きを様々な資料から読み取ることができる。
三	1	4 開国は日本の独立を守ることに繋がったのか考える。 ・その後の明治維新へとつながっていく第一歩となり、日本が近代化する礎となった。	○開国が後の日本にどんな影響を与えたのかに着目させる。	思:開国によって、日本がどんな影響を受けたのか説明することができる。

(3) 授業の構想

① 本時の指導観

前時までには生徒は、ペリーが日本に来航したのは対中国との貿易の中継地になるため、また捕鯨船の燃料などを補給するためであったということを学習している。

本時では、日米修好通商条約の締結を領事であるハリスから迫られた場面に着目し、「開国すべきか」という問題に対し、幕府側と攘夷派の大名側に分かれて考えるロールレタリング的な活動を行う。この活動を行うことで、開国側の視点から見た事象と、攘夷側から見た事象では、同じ事象でも意味が異なってくることに着目させる。ここでは、幕府側はアヘン戦争により欧米諸国と日本の間には技術力に大きな差があることに気づき、日本の独立を守るためには条約を承認するしかなかったということ、また、攘夷派の大名は、開国すれば清のように日本は植民地支配されるのではないかと、不平等条約を結ばされるのではないかと考えていたことを認識し、多面的・多角的に考察することをねらいとしている。

② 主眼

開国に対し、幕府と大名はそれぞれどんな考えを持っていたのか説明することができる。

③ 過程

学習活動・内容	具体的な手だて	形態	配時
1. 本時の学習の方向性を確認する。 (1)前時までの学習を振り返る。 ・ペリーの来航により、日本はアメリカと日米和親条約を結んだ。→駐日領事としてハリスが就任 (2)ハリスが日本に来た目的を考える。 ・日本を開国させること(日本と貿易を行うこと) (3)幕府はどのように対応したのか確認する。 ・各大名たちに意見を聞いた (4)めあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 開国に対し、幕府と大名はそれぞれどんな考えを持っていたのか考えよう。 </div>	○前時までの学習を振り返るために、ペリーの写真を提示する。 ○ハリスが日本に来た目的を考えさせるために、日米和親条約・アメリカ大統領からの国書の内容を想起させる。	一斉	10
2. 開国に対し、大名はどんな考えをもっていたのか考える。 (1)大名はどんな考えがあったのか確認する。 A積極的開国論 B消極的開国論 C攘夷論 D平和的拒絶論	○手紙を意欲的に書かせるために、手紙を運ぶ人が手紙を水たまりに落とし、見えなくなってしまったという設	個別	20

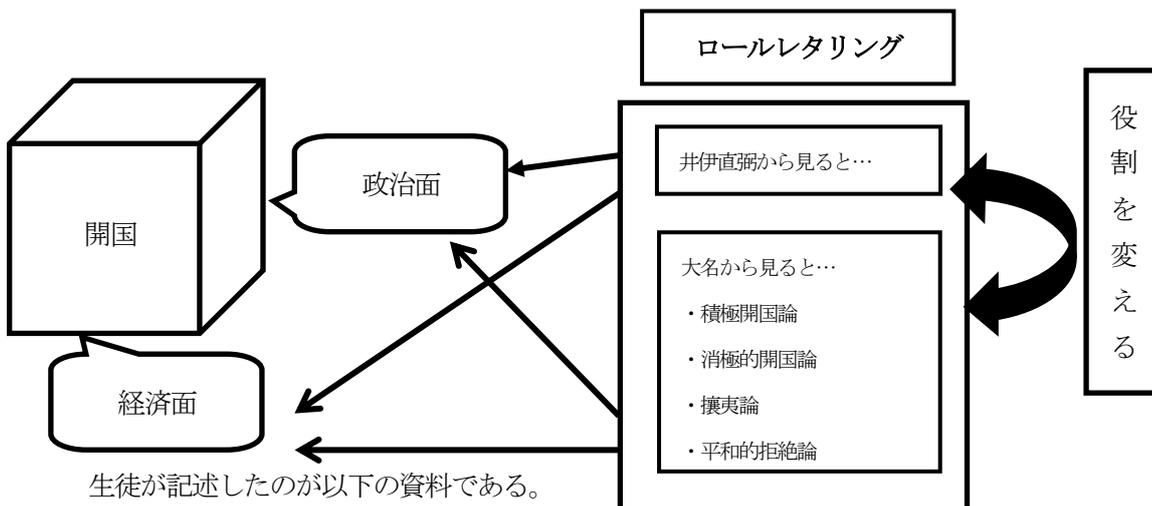
<p>(2)自分が大名だと仮定し、幕府に対し、どんな内容の手紙を書くのか考える。 A日本の産業の発展のためには開国するべきだ。 B戦争になるくらいなら、開国やむなし。 C支配されてはいけない。戦争やむなし。 D何とか戦争も開国も避けられないかな。</p> <p>3. 自分が大老の井伊直弼だと仮定し、開国反対派であるCとDの大名を説得する手紙を書く。 C戦争すれば、清のように負ける。負けてから開国するよりは今の方がいいはずだ。 D拒否すれば武力行使とハリスが言っている。どちらもは厳しいのではないか。 →日米修好通商条約を結ぶ。</p> <p>4. 本時の学習のまとめを行う。 幕府は、日本の独立を守るために開国を決断した。 大名達は、色んな考えがある中でも、共通していたのは、日本の独立を守るためであった。 →目的は同じだが、手段が違う。</p>	<p>定を行う。</p> <p>○攘夷派の大名の手紙の内容を考えさせるために、同じくアヘン戦争後、開国した「清」の資料を提示する。</p> <p>○幕府の手紙の内容を考えさせるために、アジアへの欧米諸国の進出の資料を提示する。</p> <p>○幕府がどのような結論を出したのか確認させるために、日米修好通商条約を提示する。</p> <p>◆評価項目 【多面】：政治面、経済面 【多角】：幕府、大名(A～D) (学習プリント)</p>	<p>小集団／一斉</p>	<p>15</p> <p>5</p>
---	---	---------------	--------------------

④検証の視点

検証内容	検証方法	評価基準	
<p>様々な立場(多角的)と様々な面(多面的)から物事を捉えることができる。</p>	<p>ロールレタリング的な活動による手紙の記述内容</p>	A	<p>歴史的事象について、井伊直弼とそれぞれの大名の立場から政治面や経済面を捉えることができている。</p>
		B	<p>歴史的事象について、井伊直弼といずれかの大名の立場から政治面や経済面を捉えることができている。</p>
		C	<p>歴史的事象について、井伊直弼か大名の立場から、政治面か経済面の面からしか捉えることができている。</p>

(4) 実践

ここでは、開国に対し幕府と大名はそれぞれどんな考えを持っていたのか説明することができるということを主眼において学習を進めた。



積極開国論	今すぐにも、開国をした方が良いと思います。開国をするとアメリカと通商と友好も結ぶことができるしハリスもおっしゃいました。現在発展している国の一つであるアメリカとつながることは日本にとって大きな利となり、日本も世界に進出できます。
消極的開国論	開国をせざるを得ないと思います。アヘン戦争で清はイギリスに負けた。今、清はイギリスの支配下にあるようなものです。このまま領土を統べている、日本も外国に侵略され清のようになるかもしれない。
攘夷論	外国と戦争をし、外国の勢力を打ち払うべきだと思います。今、開国をしてしまったら、アメリカに従うことになり、屈服したという形になります。それではいすれは清のようになるかもしれない。
平和的拒絶論	外国と戦争をすることはなく、このまま領土を統べている方がよいと思います。攘夷派の人たちは外国と戦争をすべきと言っていますが、産業革命が起これば発展している国と戦争をしても負けることは目に見えています。しかし、今開国をしても、アメリカに従う形になるので、平和的に解決することが良いと考えます。

【資料1 生徒A 各大名から、井伊直弼への手紙】

攘夷論	外国と戦争をすると言っていました。戦争をしても、発展している国と戦うわけですから、負けることは分かっています。負けてしまうと清のような状態になってしまうと幕府は考えたので日本の独立を守るために開国をします。
平和的拒絶論	外国と戦争をすることはなく、このまま領土を統べていると言っていました。ハリスは、屈服か、戦争かを選ばなければいけないと言っていました。このまま、ハリスへの返事をせずにいづまっても、アメリカからの要請は再度来ることになると思うのでこのまま領土を統べていることは難しいと考えました。

【資料2 生徒A 井伊直弼から、反対派への返事】

生徒Aは学習意欲も能力も高かったが、積極的開国論の立場で考えることができていなかった。事前に学習していたアヘン戦争でアジアの大国である清がイギリスに敗れたことにより、戦争には日本は勝てそうもないと予想できること、そして、外国に植民地支配されてしまうかもしれないことは理解できていた。しかし、資料1のように開国することで外国の技術などが入り、産業の発展に繋がるという経済面が見えていなかった。そこで、「鎖国したままだったら今の日本はどうなっていたと思う？」と考えさせた。すると生徒Aは「発展途上国かもしれない。今の日本の発展は、鎖国をしていたらありえない。」と答えた。資料2のように開国のメリットを考えさせることで産業の発展という経済面に気付くことができた。生徒Bは普段は意欲も低く、板書を写すことが多かったが、自分で考え積極的に学習に取り組むことができていた。理由を尋ねると「この活動には答えがないので、自分で想像するしかない。いつもは自分で考えていなくても、みんなの意見を書いておけばよかった。けど、今回はそうはいかなかったから」と答えた。また、生徒Cは学習意欲は高いが、思考力などに課題が見られる生徒である。

攘夷論	戦争をしても、今の日本では相手にもさよならからである。と武力があれば「良か、たか」...。としか今も戦争はしない。次の機会のために武力をためておく。
-----	--

【資料3 生徒C 井伊直弼から、反対派への返事】

生徒Cは各大名からの手紙では、攘夷論の大名の手紙しか書けず、内容も「戦争をして外国を追い払うべきだ」と一面的にしか捉えることができていなかった。そこで、「井伊直弼は開国したのだけど、攘夷論の大名にどんな説明をしたのだろうか？」と尋ねると、資料3のように記述した。この記述の意味を本人に確認したところ、「戦争しても技術力の差があって、今の段階では清のように負けてしまう。それなら、開国して外国の技術を学んでからやろうと説得します。」と答えた。小学校時の学習で文明開化については学んでいたため、それを思い出し記述したようである。今までと何が違ったのか、意見を聞くと、「いつもは自分目線だから実感がわからない。今回はこの人ならどのように考えるだろうかと想像する記述だったので書きやすかった。」と答えた。

積極開国論	開国してほしいです。開国しないと戦争になってしまうので。
消極的開国論	なるべく開国してほしいです。戦争したくないので。
攘夷論	開国してほしいです。戦争してもしりいので。
平和的拒絶論	開国してほしいです。でも戦争もしたくないです。

それぞれの立場とは何かにかか触れていない。
また「戦争」という面のみ記述。

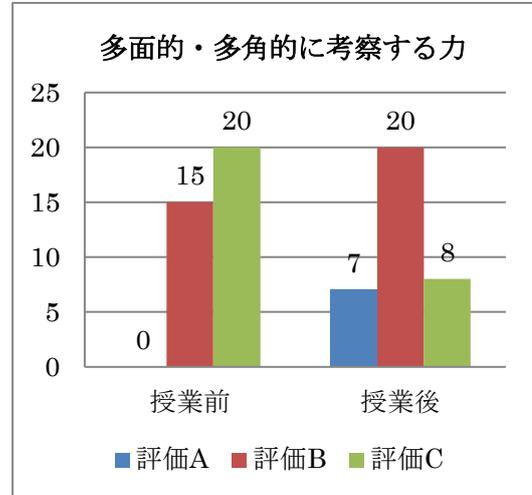
【資料4 生徒D 各大名から、井伊直弼への手紙】

生徒Dは学習意欲・能力ともに課題が見られる生徒である。最初から記述になると書く意欲を見せなかった。そのため、授業の前半に習得した概念と事前に学習していたアヘン戦争などの資料を提示した。すると資料4のような記述になった。しかし、これだけでは多面的・多角的に考察できているとは言えない。何とか経済面のことにも気づかせようと、日本の明治維新の資料なども提示したが、それを読み取ることができなかった。生徒Dに聞いたところ、「小学校時代の学習はまったく覚えていない。アヘン戦争のこともよく覚えていない。何か中国とヨーロッパのどこかが戦争したなというくらい。」と答えた。与えた資料の中にアヘン戦争のことも詳しく載っている資料があり、そこには清とイギリスが戦争を行い、アジアの大国であった清が負けたということが記載してある。また、少し後になるが高杉晋作などが清の様子を見た手紙も提示していた。そこには、清が欧米各国に支配されている様子が書かれている。そこを読み取ることができず、書くことができなかったと考えられる。

8 研究の成果と課題

(1) 全体考察

本研究の仮説は、ロールレタリング的な活動を行えば、「どのような立場」の人が「どのような面」を見ていたのかを考えるようになり、多面的・多角的に考察する力が高まる、である。生徒Aは思考力などには課題は無いながらも、政治面しか見ることができていなかった。しかし、ロールレタリング的な活動を行い、様々な立場から開国について考えさせることで、開国が日本の近代化の基礎となったことに気付かせることができた。また、生徒Bは学習意欲に課題が見られたが、ロールレタリング的な活動により意欲的に学習に取り組んでいた。これはロールレタリング的な活動が教師の話の聞いたり板書を写したりすることが少なく、決まった答えがないという理由が考えられる。生徒Cは、攘夷論から井伊直弼へと立場を交替（ロール）させることで、戦争という政治面だけでなく外国の技術を取り入れるという経済面にも気づくことができた。これは立場を変える（多角的に見る）ことで、様々な面が見える（多面的に見る）ことにつながったことを示している。学級全体を見ても授業後は35人中27名が、多面的・多角的な考察ができており、全体的にロールレタリング的な活動が有効であったことを示している。



しかし、生徒Dが戦争という一面的な見方しかできていない記述になった原因は、ロールレタリング的な活動を行う際に、資料を読み取る力や、根拠をもとに自分の意見を構築することができる力を身につけさせていなかったからと考えられる。このタイプの生徒は学級に8名おり、これまで以上に資料を活用し自分の意見を書く機会を増やしたり、ヒントとなる例文を部分的に示しておいたりするなどの配慮が必要である。

(2) 成果(○)と課題(●)

- 学習意欲に課題がある生徒も、ロールレタリング的な活動により意欲が向上した。
- 思考力などに課題がある生徒も、ロールレタリング的な活動により歴史的事象を様々な立場や面から考えたりすることができるようになった。
- ロールレタリング的な活動においては、思考力などに課題がある生徒が活動を進めにくい一面も見られた。さらに資料やヒントを提示するなど工夫する必要がある。

※参考文献

- 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 社会編』
- 井沢元彦 『学校では教えてくれない日本史の授業』 PHP 文庫
- 社会認識教育学会 『新社会科教育学ハンドブック』 明治図書
- 原田智仁 『社会科教育のフロンティア』 保育出版社
- 岡本茂樹 『ロールレタリング』 金子書房